

受賞者： 地域協同組合無茶々園 (愛媛県西予市)

受賞年
平成28年



むらづくりの経緯

- ・昭和49年、農薬や化学肥料の使用を前提とした近代農業へ疑問を持った当時の青年農業者3名が、農家らしい暮らしや生き方を探求し、寺の住職から農地15aを借り受け、伊予柑の有機栽培を開始した。
- ・「無農薬、無化学肥料栽培なんて無茶なことかもしれないが、そこは無欲になって、無茶苦茶に頑張ってみようや」との意味を込め、その園地を無茶々園と名付け、40年続く活動の礎を築いた。

受賞当時

生産活動の特色

- 無茶々園の柑橘栽培は、無農薬、無化学肥料の有機栽培を主体とした環境保全型農業の取組。
- 農薬の使用状況等によって、無農薬栽培、有機栽培、特別栽培など区分する独自の格付け基準を設定。
- 有機栽培に賛同する生産者組織「四国エコネット」を設立し、栽培指導や事前の契約に基づく買取も実施。組織の会員数は88名。
- 販売戦略として、1つの販売先に3割以上依存しないことを原則。個人会員への販売が約3割を占める。
- 産直販売や6次産業化、ITを活用した生産管理などのビジネスモデルを構築。
- 大規模農場等を活用した新規就農者の育成。

地域づくりの特色

- 漁業者と連携した山と海環境維持活動や、女性が活躍する福祉事業や配食サービス。
- 段々畑を活用した交流事業、廃校となった小学校校舎の活用。

～受賞直後の効果～

- ・受賞によって、活動の認知が地元で高まった。
- ・H29年に創立40周年記念式典を開催し、約250名が参加。
- ・総務省R3年度ふるさとづくり大賞で団体表彰を受賞。

現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

- 地域では生産者の高齢化が進むなか、R3年度の生産者数は176名(H28年168名)、柑橘の作付面積が約190ha(H28年約180ha)と生産規模を維持している。
- 四国エコネットの会員数は、R3年9月時点で115名に増加。
- 実習生のつながりで地域農業と送り出し地域(ベトナム)の連携を図り、ベトナム現地でのコショウ・カカオ豆の生産や日本国内への農作物の輸入、国内販売などに取り組んでいる。
- 新規就農者の農業法人「てんぼ印」では、R1年に乾燥野菜の加工場を作り、有機野菜の生産から加工までを一貫して行う体制を整備。
- 福祉事業では3つの施設を開設したほか、明浜小学校の学童保育の運営を実施している。
- 販売、福祉事業部門の実績は、天候等の影響を受けつつも、直販ルートの拡大や商品ラインナップの増加により、売上は増加傾向である。

受賞以降の販売実績(単位:100万円)

年度	H28	H29	H30	R1	R2
販売事業	925	865	945	935	1,020
福祉事業	163	184	195	213	217

今後の展開

- 出荷・選果施設の更新や加工場との連携によって地域農業の収益性の向上を目指すほか、福祉サービスの拡充、ベトナム事業の安定化など、引き続き独自のむらづくりを展開していく。

受賞者： 大野地区公民館

(鹿児島県垂水市)

受賞年
平成28年



むらづくりの経緯

- ・人口流出・過疎化が進行し、地元小中学校の閉校などを目の当たりにした地区住民等が昔の賑わいを取り戻したいと、平成22年に30年ぶりに青年部を復活。
- ・青年部等を中心に地区住民が10年後のありたい姿を実現するため、集落の話し合いを通じて行動計画「大野づくり計画」を2年7ヶ月かけて策定。
- ・住民主体の自治組織である大野地区公民館が、「大野づくり計画」の実現に向け、地域資源を活かした農業生産や商品開発、大学との連携、交流活動等に取り組み始める。

受賞当時

生産活動の特色

- 標高550mの冷涼な気候や寒暖差を活かした茶、さつまいも、高原野菜などの農業と、造林事業や林産物を組み合わせることにより、所得の向上を図り後継者を確保。
- 地域の保存食「つらさげ芋」に価値を見出し、ブランド化に取り組むとともに、貯蔵庫、つらさげ場を整備し、地域全体で生産拡大に取り組む。
- 女性加工グループは、つらさげ芋のスイーツ開発、養殖ニジマスの甘露煮や燻製の製造、郷土料理などの商品開発や加工販売などに取り組み、女性が主役の6次産業化を積極的に推進。

地域づくりの特色

- ① 平成22年から開始した大野原(うのばい)いきいき祭りで、つらさげ芋や地域農産物を販売。毎年1,500人が訪れる。
- ② 大野の人たちや地域の豊かさの魅力に惹かれた若者を受け入れるため、NPO法人を設立し、ソーシャルビジネス等の創出、空き家改修、交流活動等を通じた定住促進により、人口増加傾向となる。
- ③ 大野地区公民館、鹿児島大学、垂水市が連携して運営する農山村フィールドや廃校を活用した自然学校に、県内外から年間3,000人の子ども等が訪れ、地域に賑わいを創出。
- ④ 若い力で伝統芸能の「棒踊り」を継承し、鳥獣害防止対策や生活環境整備(簡易水道の設置や神社の改修など)に住民一体で取り組む。

～受賞直後の効果～

・現地視察や研修の受入、講演依頼等の問い合わせが多くあった。

現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

- 今後10年間の大野地区のあり方について、地域住民が話し合いを実施し、「第2期大野づくり計画(R3～R12)」を策定。
- NPO法人が中心となり大野原＝「うのばい」を商標登録し、加工品等にはロゴシールを貼り、他地区との差別化を行っている。
- 平成22年から開催している大野原(うのばい)いきいき祭りは、R2、R3は新型コロナウイルスにより開催を見合わせているが(市内道の駅での販売会を実施)、例年約1,500人が来場している。
- 自然学校については、現在でも市内外より例年約3,000人の子ども等が訪れている。(R2～R3はコロナにより受入自粛)



第2期大野づくり計画話し合いの様子



商標登録「うのばい」のロゴマーク

今後の展開

- 大野に来る人・住む人を増やし続けたい。
(第2期大野づくり計画の1番の目標。)

受賞者：ゆかい村風間浦鮫鯨ブランド戦略会議（青森県下北郡風間浦村）

受賞年
平成28年

日本農林
漁業振興
会会長賞

むらづくりの経緯

風間浦村は漁業と観光業が盛んな地域であり、人口減少が進行する中で、本県への東北新幹線駅開業を見据え、漁業と観光業が連携した交流人口の増加に向けた検討が始まった。その中で、「キアンコウ」の漁獲量や漁期に一定のルールを設ける資源管理の取組を通じて、キアンコウの付加価値向上や持続的資源利用の可能性が示唆され、全国的にも珍しい生きたままの水揚げや、伝統の捌(さば)き方である雪中切りなど、村民が地元のキアンコウの強みに気づき、これを核としたむらづくりの取り組みが始まった。

受賞当時

生産活動の特色

- ゆかい村風間浦鮫鯨ブランド戦略会議が中心となり、キアンコウのPRやブランド化に取り組んだほか、構成員である風間浦村きあんこう資源管理協議会がキアンコウの資源管理に取り組んだことで、安定した漁獲量と単価の上昇が見られた。
- 村民を巻き込んだ風間浦鮫鯨まつりを開催することで、地域が一体となった取り組みに発展している。



ブランドタグ



キアンコウ
(ブランド名: 風間浦鮫鯨)



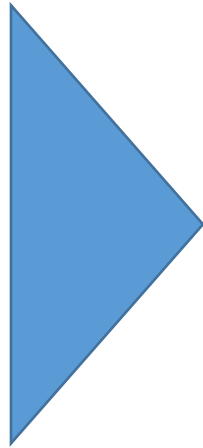
風間浦鮫鯨まつりでの
キアンコウの雪中切り
(地域独特の捌き方)

地域づくりの特色

- 水循環を守る活動として植樹や下草刈り、清掃活動を継続的に実施している。
- 小学生を対象とした「水産教室」を開催し、家族ぐるみで参加することにより、地元の文化の伝承や地産地消への意識の強化など、地域の絆を一層強くしている。

～受賞直後の効果～

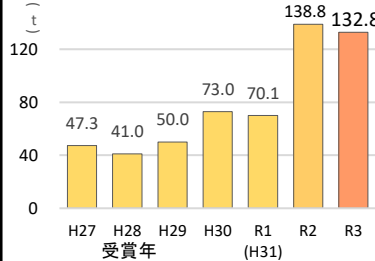
- ・マスコミで取り上げられ、風間浦村及び風間浦鮫鯨の知名度が向上
- ・風間浦鮫鯨フルコース料理目当ての観光客が増加



現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

- 継続した資源管理の結果、安定した漁獲量を確保。
- 平成21年に開始した「ゆかい村風間浦鮫鯨まつり」は、現在「ゆかい村風間浦鮫鯨感謝祭」として、風間浦村の代表的なイベントとして定着(令和2、3年はコロナ禍により縮小開催)。
- 品質と資源管理の取組が評価され、令和元年6月に開催されたG20各国首脳夕食会において、風間浦鮫鯨がメインメニューの1つとして提供された。



風間浦村における
あんこう漁獲量の推移
(出典: 県水産振興課調査)



風間浦鮫鯨感謝祭
(令和2年2月)



G20各国首脳夕食会で提供された風間浦鮫鯨メニュー

今後の展開

- 今後も風間浦鮫鯨を核として、漁業と観光との一体化、地域の雇用拡大、後継者の育成、漁業資源の維持・増大や下北地域の賑わい創出に向けた活動を推進して、持続的な漁村地域づくりを進める。